



FUKUI 2024

第
47
回

全国育樹祭

育てよう 幸せ芽吹く 緑の大地

併催行事

育林交流集会



開催の記録

主催 福井県、公益社団法人国土緑化推進機構

開催概要	1
プログラム	2
開催の様子	3
ナビゲーター紹介	5
事例発表① 「私の山の楽しみ方」	5
事例発表② 「地材地建、Long Loved Designで 100年後の美しい風景をつくる」	11
事例発表③ 「宿場町のまちづくりで森を活かす」 ～若狭町熊川地区～	17



開催概要

第47回全国育樹祭の開催テーマ「育てよう 幸せ芽吹く 緑の大地」に基づき、「森とともに生きる、地域の未来」と題して、県内外の森林・林業・木材産業関係者などに御参加いただき、森林への親しみや木材の利活用などをテーマとした活動事例を発表しました。

参加者数：240名

主催 福井県、公益社団法人国土緑化推進機構

後援 敦賀市、小浜市、美浜町、高浜町、おおい町、若狭町、近畿中国森林管理局、公益社団法人福井県緑化推進委員会、福井県森林組合連合会、福井県木材組合連合会、福井県山林協会、福井県木材市売協同組合、福井県嶺北木材林産協同組合、福井県プレカット協業組合、林業・木材製造業労働災害防止協会福井県支部、福井県造園業協同組合、一般社団法人福井県造園協会、一般社団法人福井県建築士会、一般社団法人福井県建築士事務所協会

会場 プラザ萬象 小ホール（福井県敦賀市）

日時 令和6年10月19日（土）13：00～15：40

出演 オープニング（吹奏楽演奏）

福井県立敦賀工業高等学校 吹奏楽部

プレゼンター

か ほ 氏（登山YouTuber）

石田 伸一 氏（㈱石田伸一建築事務所 代表）

時岡 壮太 氏（㈱デキタ 代表取締役）

ナビゲーター

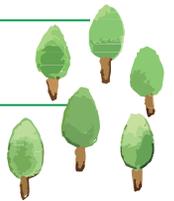
石丸 香苗 氏（福井県立大学学術教養センター 教授）

司会

佐野 心泉 氏、島津 亜依莉 氏

（福井県立敦賀工業高等学校2年）

13:00	オープニング	福井県立敦賀工業高等学校 吹奏楽部 1. 学園天国 2. 風になりたい 3. September
13:25	開会挨拶	(公社) 国土緑化推進機構常務理事 今泉 裕治
	来賓挨拶①	林野庁森林整備部研究指導課長 安高 志穂
	来賓挨拶②	(一社) 全国林業改良普及協会専務理事 中山 聡
	歓迎挨拶	敦賀市長 米澤 光治
	ナビゲーター紹介	福井県立大学学術教養センター教授 石丸 香苗
13:50	事例発表①	登山YouTuber かほ
14:35	事例発表②	株式会社石田伸一建築事務所代表 石田 伸一
15:05	事例発表③	株式会社デキタ代表取締役 時岡 壮太
15:40	閉会挨拶	福井県嶺南振興局長 児玉 康英
	終了	



開催の様子

会場



プラザ萬象

受付の様子



会場内の様子



配布物



司会



福井県立敦賀工業高等学校 島津 亜依莉、佐野 心泉

オープニング



福井県立敦賀工業高等学校 吹奏楽部

開催の様子

開会挨拶



公益社団法人国土緑化推進機構常務理事 今泉 裕治

来賓挨拶



林野庁森林整備部研究指導課長 安高 志穂

来賓挨拶



一般社団法人全国林業改良普及協会専務理事 中山 聡

歓迎挨拶



敦賀市長 米澤 光治

閉会挨拶



福井県嶺南振興局長 児玉 康英

ナビゲーター紹介



石丸 香苗

福井県立大学学術教養センター 教授

京都府出身

農学博士

専門は森林生態学とブラジルアマゾンの地域研究

著書に「森林生態学(共著・朝倉書店)」「ノーライフ・ノーフォレスト(分担執筆・京都大学学術出版会)」「抵抗の森・創造の森－アマゾン開発と民衆運動(分担執筆・現代企画室)」など

皆さんこんにちは。福井県立大学の石丸です。私は森林生態学が専門で、日本やアマゾンで、人が森林をどのように利用しているかについて研究をしています。

本日はナビゲーターとして、プレゼンターの皆さんと、会場の皆様方をつなぐ役割をさせていただきます。

登壇者の皆様、司会の敦賀工業高校の生徒さん、会場の皆様とともに、森林から得られる地域の暮らしのめぐみ、そして私たちが森林に対してできることを考える場になればうれしいです。

事例発表①

「私の山の楽しみ方」



かほ

登山 YouTuber

岐阜県出身

テレビ番組の制作会社、広告代理店、IT企業を経て2019年10月にYouTubeチャンネル「かほの登山日記」を開設し現在の登録者数は30万人を超える

国内の山はもちろん、現在は世界7大陸の最も高い山を目指す、セブンサミッツにも挑戦中

著書に『山登りを趣味にするソロ登山ステップアップ』

登山 YouTuber のかほと申します。

育樹祭の目的は「継続して森を守り育てることの大切さを普及」。本日の講演で、登山の YouTuber として活動する私の経験を紹介し、みなさんに山や自然に親しみをもっていただける一助となれば幸いです。

それでは本日のトピックスを紹介します。

01 登山 YouTuber とは

02 どんな山に登る？

03 各地域の環境保護

04 私たちにできること

以上の4つのトピックスに沿ってお話します。

ひとつめの登山 YouTuber とは、ですが、高校まで岐阜県で過ごし、進学を機に上京しました。企業勤めを経て2019年に YouTube チャンネル「かほの登山日記」を開設しました。2020年2月で勤めていた会社を退職し、YouTuber を専業としています。現在の登録者数は32万人くらいです(2024年10月時点)。

YouTube の活動は実際にどんなことをしているのかと言いますと、自分が行った山での登山の様子を編集して YouTube に公開しています。登山は元々趣味だったので、趣味が仕事になるというとても幸せな職業だと感じています。YouTuber での活動を通して山岳雑誌への出演、文章の寄稿や、イベント出演といった活動も行っています。



写真は寄稿した山岳雑誌、出演した NHK 「山カフェ」パーソナリティの石丸謙二郎さん、今年長野県で開催されたトークショーのもので

す。

登山 YouTuber なので山に登るわけですが、実際にどんな山に登っているのかをご紹介します。

突然ですが、みなさんは日本にはどれだけの山があるかご存知ですか？答えは16,667個。大体、1つの都道府県に350個山がある計算になります。

しかし、これは地図に載っている山の数なので、地図に載っていないものを含めたらこれ以上です。

私はこの16,667以上の山の中から日々、山に登っています。ちなみに、みなさんはどれくらいの山の名前を知っていますか？富士山は誰もが知っていますよね。標高が3,776mで日本で一番高い山です。

それでは、標高が2番目に高い山はどこか知っていますか？



答えは北岳という山で標高は3,193m あります。富士山よりも583m 低いです。北岳の山頂の写真です。登山者には結構人気の山で山頂からは富士山を見られます。この北岳は南アルプスという山脈にあります。



その他にも北アルプス、中央アルプスというものがある、3つを総称して日本アルプスと

言います。この日本アルプスも私が普段登っている山の一部です。この他にも具体的に過去に私が登った山を少しお見せしたいと思います。



奥穂高岳 3,190m

こちらは奥穂高岳という山で標高は3,190m。

北アルプスという山域にあって、岐阜県と長野県の県境にあたります。

そこで見た面白い現象があります。



ブロッケン現象

これはブロッケン現象というもので、光の輪っかのようなものができています。太陽の光が後ろから差し込んで、自分の影の周りに色のついた光の輪が現れています。山に登っているとこんな不思議な現象に出会うこともあります。



雨飾山

次に紹介するのは雨飾山です。

標高は1,963mで長野県と新潟県の県境にあります。



昨年の10月に登りましたが、ちょうど紅葉の時期で山の斜面がオレンジ色になっています。

この登山道、何か浮かび上がって見えませんか?わかりやすいように赤い線を付け足してみました。山頂から見下ろすと、登山道が女性の横顔のようになっていて、これを「雨飾山の女神」と登山者の間では呼ばれています。



旭岳

こちらは北海道の旭岳です。標高は2,291mで北海道の中で最も高い山です。北海道は大自然のイメージがあるので意外に思う方もいるかもしれませんが、北海道には標高3,000mを超える山がありません。ただし、北海道は緯度が高いので気象条件は本州の山よりも1,000m高いと言われていています。例えば北海道の2,000mの山であれば、本州の3,000mの山と同じくらいの環境ということです。



これは7月に撮影した旭岳の裏側の斜面にある雪渓です。夏に雪があるなんて街の中では考えられないと思いますが、山ではこんな風に夏でも雪が残っているということもあります。この雪渓、雪の残った部分を遠くから見るとこんな感じになります。現地のガイドさんはこれを「ゼブラ」と呼んでいます。雪と山の斜面がしましまになっていて、シマウマのように見えませんか？北海道の山はこんなふうに壮大な景色を見せてくれます。

これまでは日本の山を紹介してきましたが、海外の山にも度々登山に出かけています。



これは過去に私が訪れたことのある山の一例です。

私が登ったことのある中で最も標高が高いのは、8,163mのマナスルという山で、ヒマラヤの山です。国はネパールです。エベレストもこの辺りにあります。

マナスル登山の様子を少しお見せしたいと思います。



こちらはマナスルベースキャンプの様子です。ベースキャンプから見える雪をかぶった美しい山がマナスルだと言いたいです。手前の山が邪魔をしてベースキャンプから山頂は見えま

せん。

現地スタッフのシェルパと呼ばれる人たちです。登山は一人で行うわけではなく、シェルパ族出身のスタッフがテントの設営、食事の準備などをサポートしてくれます。

食事は現地スタッフが作る日本料理で、カトマンズの日本食レストランで経験を積んだキッチンスタッフが毎日おいしい食事をサポートしてくれます。食べ慣れた味で食欲が低下することなく食事ができます。



こちらは標高はおよそ6,300mのキャンプの様子です。早朝にテントの外に出ると雲海が広がっており、そこから日が昇ります。



マナスルの山頂 8,163m です。最終キャンプを出発してからおよそ14時間でマナスルの山頂に到着しました。山頂でシェルパと記念撮影。その後、10時間かけてベースキャンプに戻ります。



マナスル山頂 8,000m付近から見るヒマラヤ山脈の写真です。上に見えるものが一つもなく、全てのものを見下ろすという珍しい経験をしました。



今年の5月に登ったデナリという山を紹介したいと思います。デナリはアラスカの山で標高は6,194m。昔はマッキンリーと呼ばれていましたが、オバマ大統領の時に名称がデナリとなりました。デナリという言葉は現地の言葉に由来するそうです。日本の冒険家である植村直己さんはデナリの単独登頂後に行方が途絶えています。

デナリ登山では一人につき50~60kgの荷物を持ちます。背中に15~20kgくらい、ソリに30~40kgくらいの荷物を持って山を登ります。デナリ登山にはネパールのシェルパのようなスタッフはいません。ガイドと登山者のみで登ります。アメリカの国立公園には厳しい法律があり、デナリ国立公園ではポーターを雇って連れて行くことは禁止されています。今回は実は登頂ならず…で標高5,000mのポイントで撤退することになりました。

40~50度の氷の斜面があってそこを登ることができませんでした。



デナリ国立公園の悲劇

ここからは、私が過去に体験した自然保護の取り組みを紹介させていただきます。

デナリ国立公園の例を紹介します。先ほどヒマラヤのマナスルに行ってきたという話がありますが…。こういった登山ではトイレをどうやるか、気になりませんか？基本的には雪に穴を掘ってトイレを作り、用を足します。つまり、その土地に自分達の排泄物を置いてくるわけです。標高の高いところで用を足すと寒くて排泄物は凍るので、凍ったまま雪の中に残ります。しかし、近年そうではないケースが起こっています。先ほど、今年の5月に訪れたと紹介したデナリ国立公園で、登山者の排泄物について悲劇が起こります。寒い場所で用を足すと排泄物は凍ったまま残ると言いましたが、近年の気温の上昇により氷が溶け、その中に埋められた登山者の排泄物も溶け出し、山から流れる水に混じって流れてしまうのです。悪臭が問題になっていたり、デナリ国立公園の生態系が破壊されてしまうのではないかとということが危惧されています。



そのような登山者の排泄物に対して、デナリ国立公園では対策が取られています。デナリ国立公園ではCMCというバケツを持って登山

をします。CMCはClean Mountain Canの略です。緑色のバケツに黒い蓋がついています。これは何かというと…山のトイレです。中にはビニール袋をセットしてこの中に大便をします。今までは山の中に排泄物を残していましたが、このバケツに用を足して大便を麓まで下ろすのです。正直、荷物が増えるし、重いので登山をする上では大きな負荷になりますが、登山者の一人として山を汚さないということは一つの責任であると思っていますので、とても良い取り組みだなと感じています。(ちなみに、小便是持ち帰ることはなく、雪の上にそのままします。)高山に登る中で最も苦勞するのがトイレ問題なのですが、このトイレはかなり難易度が高いです…。

世界的にもこのような動きは活発になってきていて、今年からエベレストでも大便を山に残さず持ち帰るというルールができました。

従来の登山道整備はヘリコプターで運んだ資材で行います。その場に元々あったものではないため、登山道の老朽化や崩壊が発生した場合、かえって荒廃を進めてしまう場合があります。また、木材を固定するために打った金属の杭が剥き出しになって危険な場合も。

資材をふもとから輸送するのではなく、現地にある倒木や土砂を利用してなるべく自然の形に近い状態で登山道を整備する方法です。自然へのダメージが少なく、元々その場にあった木や土なので崩れてしまった場合にもかえって荒廃させてしまうというリスクがありません。



写真は、近自然工法ではない登山道の一例。

せっかく予算を注ぎ込んで整備をしても、現地の環境とそぐわない施工をしてしまったがゆえに数年で再び荒廃してしまうということもあります。木道が朽ちてしまうと人はそこを歩かずに、本来登山道であった場所ではないところにはみ出して、別の道ができてしまいます。

生きていく中で自然にダメージを及ぼさないということは難しいです。

しかしながら、自然の中で遊ぶことを楽しむ人間として少しでも自然に負荷をかけないような行動を選んでいきたいと思います。

<ナビゲーターのコメント>

登山は山と人が触れ合う一番大きな場。そこで山の自然に出会うことで、環境意識なども芽生えていくと思います。

ただ、いろいろな資源と同じで、山も使うだけだとかほさんのプレゼンにあったように、「ごみ」「表土の流出」など、どんどん劣化していつてしまいます。

山と触れ合って山や自然を好きになることで、その自然を積極的に維持管理して守っていく、そういう取組みのサイクルが生まれると思いました。

嶺北には文殊山という350m程度の山があり、毎日登る人達もいるなど、地域の人達の暮らしに根付いた山があります。この文殊山も、登る地域の人達によって、登山道などが維持されています。

森と触れ合うことが出来る登山は、地域の自然を受け継いでいく大切な方法の一つだと感じました。



事例発表②

「地材地建、Long Loved Design で 100 年後の美しい風景をつくる」



石田 伸一

株式会社石田伸一建築事務所 代表

新潟県出身

住宅建築会社を経て 2018 年に石田伸一建築事務所を設立

2020 年に製材所(株)UCファクトリーを立ち上げる

住宅建築設計のほか、森とまちをつなげるまちづくりの実践や、「魚沼杉」のブランディング、住宅の長期保証制度開発など幅広い活動を展開している

まずは自己紹介をさせていただきます。

石田伸一と申します。1979年の12月の新潟県、雪深い地域十日町市、旧松代町というところの出身です。地元の高校を卒業して、その後建築系専門学校に進み、新潟の住宅会社に新卒で入社し、その後に設計事務所として、石田伸一建築事務所という設計事務所を開設し、2020年の11月には製材所の会社を設立し、今は大工公務店の会社、そして、野きろの杜というところにまちづくりの会社を設立しております。

大事にしているのが地材地建、その地域の材料、その地域の人材でその地域に建てるという、この地材地建という考え方と Long Loved Design、長く愛せる本物のデザインというものを掲げ、林業から製材建築設計、ものづくりまちづくりと行っております。



私自身がすごく大事にしているのが、この僕らの原風景、僕の地元です。今は24の戸建てが建っている集落で、この三軒の古民家は江戸末期に建てられた建物として、僕の地元は外壁を杉板で作っている家が大半で、昔ながらの古民家の考え方というものなので、100年前の住宅に学んで、今後100年後のスタンダードを作っていきたいと考えています。その古民家に現代の技術を取り入れたリノベーションというものを行ったり、古民家の考え方を取り入れて現代の土間を作った新築の住宅など、こういった形の建築設計などを行っております。

新潟県の森林について

◆森林資源の概要

項目	新潟県	全国	全国順位
総面積 (千ha)	1,259	37,798	5
森林面積 (千ha)	856	25,048	6
(林野率 %)	68.1	67.2	23
保安林面積 (千ha)	427	12,245	5
(保安林率 %)	49.8	48.9	12
民有林面積 (千ha)	565	17,389	6
(民有林人工林率)	14.1	7.916	25
(民有林人工林率)	24.9	45.5	45
民有林人工林面積 (千ha)	6.373	279.538	20

出典：国土院調査、林野庁「森林資源の調査（平成29年3月31日現在）」、林野庁（平成30年3月31日現在調査値）、統計局「新潟県の主要指標（平成29年10月1日調査）」



新潟県 140,700ha
人工林のほとんどが杉



魚沼の山から木を切り、そしてまた植える。
現在切っているのは樹齢87年の杉。

今回福井県にお邪魔しておりますが、新潟県の森林についてということで少しご紹介できたらなと思っています。新潟県の森林の総面積は全国第5位。森林の面積は全国第6位。保安林の面積や民有林の面積なども書いておりますが、森林の面積などは全国の上位となっております。この民有林というものについては全国で真ん中あたりですね。民有林国有林の面積の割合としては、森林面積のうち66%、約3分の2が民有林です。そして、この民有林の中でも天然林と人工林とありまして、人工林が25%、4分の1ぐらいですね。この人工林のほとんどが杉、というのが新潟県であります。この新潟県って1メートル以上雪が積もったりする地域なので、ヒノキが漏脂病になって育たないということで、人工林のほとんどが杉という地域です。

人工林の樹齢に関しては樹齢50年から70年の杉が多いというのが特徴です。戦時中や戦後に植えられた木が多くて、この高齢級林といわれる年を取った木というのがすごく多いのが新潟県の特徴でもあります。

福井県もそういったところかもしれませんが、私の地元、魚沼の山から木を伐って、そしてまた植える。現在伐っているのは、樹齢87年の杉の山を伐っています。3ヘクタールずつ山を伐り出して、伐ったら植える、伐ったら植えるというような再生林というのを地域の皆さんとともにやっております。



魚沼の杉は一般的にはウィークポイントがいっぱい！



樹齢80年以上の大径木が多く
ほとんどが根曲がり杉



黒芯が多い



世界有数の積雪地域

魚沼の杉というのは、実は一般的にはウィークポイントがいっぱいです。樹齢80年以上のこの大径木が多くて、ほとんどが雪のせいでいいですか、雪に揉まれて育っているの、ほとんどが根曲がり杉といって、根が曲がっている杉になります。そして、黒芯といわれるものが多いエリアですね。そして、この何よりも世界有数の積雪の地域ということで杉が育たないところになっています。なので、新潟県というのは農業がかなり盛んではありますけれども、林業は、実は後進県といえますか、林業自体はそんなに育っていないエリアになります。山の木もほぼ手入れされず、枝打ちがされない状態の

杉の山というのが多いので、節も多いというところがポイントです。



この根曲り杉や黒芯をウィークポイントと言われていたものをストロングポイントに変えていきたいというのが、この魚沼杉ブランディングということで自分が行っている取組みですね。魚沼杉というものは、魚沼の米や、魚沼のお酒、魚沼の水と一緒に魚沼の杉というものも、全国に広めていきたい、ブランディングしていきたいということで行っています。



この魚沼の木というのが、魚沼の山というものです。これは、魚沼の米や水やお酒というのは、全てこの上流にある山のおかげですね。山から出てきた地下水から流れ出た、軟水のお水、こういったものがお米やお酒や、何よりも水を作っている。なので、やっぱり山が大事、山の木が大事と考えているので、魚沼という部分にこだわった家づくりをしています。そのウィークポイントというものをこのストロングポイントというのに変えられればなど。雪深くて目が詰ま

っている、そうした大径木を活かして構造材や外壁などに利用しています。通常は杉というと、柱に使ったりすることが多いんですけども、我々は梁材という横の材料にも使ったりしながら、合板を作ったり外壁にしたりそういったいろいろな材料を作ってウィークポイントをストロングポイントに変えています。



その魚沼の山から伐り出した木を製材所に運んでそれらを製材しております。これがUCファクトリーです。UC というのが Unuma Cedar、魚沼杉の工場という意味で UC ファクトリーという名前にしています。2,000 坪の土地に 460 坪ぐらいの建物が建っている、十日町市にある製材所。もともとはお世話になっている製材所があったんですけども、その製材所さんが事業の廃業を考えているということで、僕の方で引き継いで、自分の会社ということもあって、魚沼杉をブランディングする工場にしたいということで、魚沼杉の工場ということでスタートしました。



それらの魚沼の山から伐り出した木を下流の新潟市で使うことで、森とまちをつなげ「人と人がつながる野遊びのある街、野きろの杜」というまちづくりを、開発をした不動産会社さんとこのランドスケープ全体のデザインや戸建ての建物や建っている施設の建築設計を担当した弊社、そして新潟のアウトドアメーカー・スノーピークさんの3社でスタートしました。6,600坪約2万平方メートルにあるこの土地に、複合商業施設があったり、4棟8世帯の高性能賃貸と呼ばれる賃貸が建っていたりして、60坪の土地の街区と70坪の土地の街区、そして、108坪の平屋の街区。この分譲地の真ん中にみんなが集まる広場として、建物が建っています。

こちらに建っている建物が、この野きろの杜が新潟県の杉を使うというのを、建築協定という義務にしている分譲地になります。景観条例という形で、景観条例などで色で縛るといものは多くあるかと思いますが、福井県でもこういった景観条例のある地域はあるかと思いますが、この野きろの杜はこの分譲地だけの条例、建築協定にしています。一応注文住宅の分譲地となっております、注文住宅が建てられる分譲地なんですけども、目指すは30年後100年後の美しい風景づくりというのを、この分譲地では目指しております、新潟の杉板を使った外壁や漆喰でないだとダメですと。通常の窯業系サイディングという一般的にある外壁やガルバリウムやレンガなどは禁止、杉板外壁推奨という分譲地になっています。



これが、みんなが集まる広場「Life Site 野きろ」という場所になります。



そして、アウトドアのショップとお花屋さんスイーツとかのお店が入っているのが、この「Mall Site 野きろ」になります。このちょっと外観がガタガタしたデザインかと思いますが、これもすべてすぐ近くにある新潟の弥彦山と角田山という山並みをイメージして作った建物になっています。



現代土間の家

そして、この「現代土間の家」、地材地建というのを考えて推奨しているので、屋根は地元の瓦・安田瓦という日本最北端の瓦を使った屋根と、魚沼の杉樹齢86年の杉を外壁に使って構造材も魚沼の山から伐り出した構造材、ないしは新潟県で伐り出した杉材を使っております。



泊まるように暮らすH邸

こちらは無塗装の杉の外壁にした場合、北欧のようなこの木の外観というものをちょっと作った、「泊まるように暮らす」をコンセプトで作った建物ですね。家具だったりとか意匠材、内装材なども新潟魚沼の杉を使っております。



企画型提案住宅

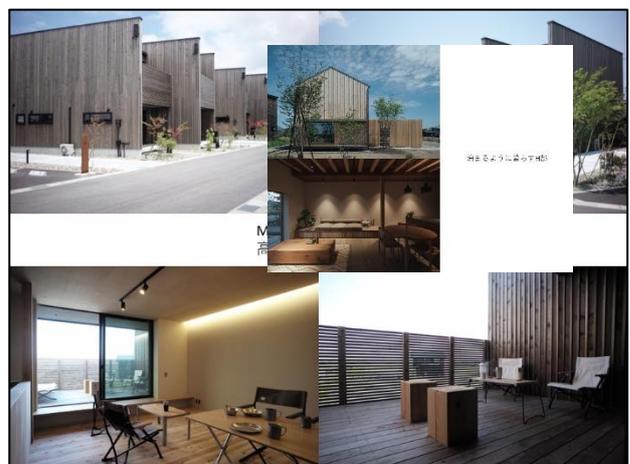
暮らしに遊びを足す
notus home

こちらは企画型提案住宅という建物でコストを抑えた住宅なんですが、こちら木という木すべて魚沼の杉で作っております。



現在建築中の平屋

現在建築中の平屋です。こちらは平屋街区というところに建っている建物でして、ぐっとトーンを落としたグレーの洞窟のような、しっとりとした形の建物になるようにということで設計しております。



また賃貸住宅も建っております、高性能賃貸となっておりますが、注文住宅を建てる方が快

適な暮らしをできるというものには疑問を感じておりまして、訳あって家を転勤であったりとかで建てられない人や、賃貸だからといって結露が多くて地震にも弱くて、というものがやっぱりあってはならない話なので、こういった賃貸でもちゃんと構造計算というのを行った、雪が1.1メートル乗った状態でも大地震に耐えられる、そういった強固な構造。そして、トリプルガラスや断熱材も外の断熱と内側の断熱とダブルで断熱をした高性能な高機密高断熱での賃貸住宅。4棟8世帯建っておりますが、こちらも魚沼の杉や新潟県産の杉を使った賃貸住宅になっています。2018年からこのプロジェクトも動いているので、高性能賃貸の先駆け的な形ではないかなと思います。



地域に根差し、古き良き文化を継承し、コミュニティのある街づくりを。

また、このアウトドアの遊びを楽しむ街。野遊びを楽しむ家ができるように、9畳ほどの大きなプライベートバルコニーというものが設けられている賃貸住宅になっています。

そしてこの野きろの杜は、地域に根差し古き良き文化というものを継承していて、コミュニティのある街を作っていくことを大事にしています。温故知新という言葉がありますけれども、昔ながらの良い風習といったものは、この野きろの杜でも弊社も大事にしている、建物の骨組みが組み上がって棟上げをしたら餅まきをしたり、この真ん中の広場でお茶を楽しむ会をしたり、ここでアーティストさんを読んで夏の夕暮れ時にこういったコンサートみたいなものをや

ったり。そして、野きろの杜では毎月1日だけ、ももとは毎月3日は野きろの日という名前で、平日であろうが、祝日であろうが、土日であろうが、毎月3日は野きろの日というのをやっていました。

これからは毎月第1土曜日を野きろの日として、1月はお正月の催しもの。2月は節分、鬼がやってきて豆まき、3月は雛祭り。4月は桜餅であったりとか、そういった季節のものを食べながら5月は子どもの日。ちょうどこの写真に映っているのは子どもの日。ゴールデンウィークに行われたイベントになりますが、地域の皆さんが使っていない鯉のぼりなどをいただき、それを展示しています。こういった日本の古き良き文化というものを、これからの後世にも伝えていきたいという思いで、この分譲地にどんどんと老若男女が集まり、そして、これから30年後100年後とうつくしい風景を作っていきたいなと思っています。僕たちこの建築の仕事というのは建物1軒建てただけではただの建物ですけれども、2軒3軒と並ぶと、街並みになって、これが集合体としてなると、風景を作るものだなと思っています。なので、私たち建築の仕事は街並みや風景を作る仕事だなと考えているので、なので、建築という仕事は、僕たちが亡くなった後も美しい場所として残って行って、地域の皆さんに愛される、そういったまちづくりができたかなと思っています。



地域に根差し、古き良き文化を継承し、コミュニティのある街づくりを。

そして、地元集落のリデザインへ。

そして、野きろの杜は新築での形でしたが、

僕自身の地元、新潟県十日町市芋島という場所なんです、こちらが今現在24の建物が建っている集落になっています。豪雪地帯ですね。大地の芸術祭というのが始まったのが、この旧松代町という場所。僕の地元になりますが、この集落のデザインとして、江戸末期 200 年から 250 年ぐらい前かと思いますが、このかやぶきの上に板金で屋根をかけた、この建物を中心として、これからこの集落自体のリデザインということで、古き良き文化を残しつつ、新築ではないリノベーションを利用した場所づくりというのができたらなと思っております。

この建築という仕事を通して、地材地建 Long Loved Design で 100 年後も美しい風景を作る、この目的に向かって、これからも活動していけたらなと思えます。

ご清聴ありがとうございました。

<ナビゲーターのコメント>

「古き良き文化の継承」「リデザイン」が印象的でした。

持続的な社会を作っていくために、環境負荷が大きくなかった昔の資源利用のスタイルから学べるところは大きいと考えます。

地域で取れる色々な資源を、地域で使うような地産地消のサイクルが古く社会にはありました。ただ、現代の生活では、不便な昔の地域の生活をするにはできません。古くからあるものの知恵や環境に良い部分は取り入れながら、現代のライフスタイルに合った形に合わせていかなければならないと考えます。

まさに、「古き良き文化の継承」と「リデザイン」。

こういう取組みが増えていくことが、これからの社会にはとても重要なことだと考えます。



事例発表③

「宿場町のまちづくりで森を活かす」

～若狭町熊川地区～



時岡 壮太

株式会社デキタ 代表取締役

福井県出身

2011年にデキタを設立

築地場外市場や気仙沼市等での施設開発を手掛け、2019年に福井県若狭町に会社を移転。自身も福井県にUターンする

若狭町熊川地区において古民家を活用した不動産業、古民家宿等の宿泊事業、農産品を活かした物販事業等を行っている

2024年3月よりアウトドア施設「山座熊川(さんざくまがわ)」の運営に携わっている

よろしくお願いします。株式会社デキタの時岡といいます。



我々は若狭町の熊川宿で古民家を活用した宿泊事業や地元の農産品を使った食品加工事業、最近では熊川の山の上の敷地に新しくアウトドア施設を開発して、アウトドアの施設運営の事業も開始しております。

ももとは東京で起業した会社なんですけども、僕が若狭の出身ということもあり、今から6年前に熊川宿に会社を移して、僕も20年近くぶりにUターンしてきたような会社になります。



我々は若狭町の熊川宿というところを本拠地に活動しています。熊川宿は若狭町の山の方にある場所なんですけども、京都から意外と近くてですね。公共交通機関でも京都から1時間程度で来れる場所になっております。もともと小浜から船とか引き船とか馬を使って、京都方面に荷物を運んでくる荷継ぎ場として栄えた宿場町でして、熊川塾までは馬や引き船が入れたんですが、そこからは山に入っていく

トレイルインのポイントになるので、1キロに渡って、宿場町が発展したそんなエリアになっています。



とても綺麗な村で今から30年近く前に文化庁の伝建地区(伝統建造物群保存地区)にも指定されて、保存の街づくりが今まで展開されてきたんですけども、一方で主たる産業もなかった村なので、人口減少が非常に進んでしまっていて、今では3分の1ぐらいが空き家になってしまっていて、高齢化率も大変高い村になってしまっています。



我々東京からこっちに移るときに古民家をお借り上げて、自分たちで改修をして、シェアオフィスを作るところから事業を開始しました。2018年4月にオープンした菱屋という建物が、本拠地になっているんですけども、空き古民家を大々的にリノベーションして、スタート時は4社が入るシェアオフィス、また、その直後に東京から出店してくれたカフェが入った複合施設のような形で運営をしています。



菱屋を作った後、今から 5 年前に八百熊川という古民家分散宿泊施設というのを開始しています。村の中に空き家がたくさんあるので、それを一棟一棟お借りしたり取得したりしながら、自社でそれを宿泊施設として改修していく事業になります。



それぞれ所有者さんと交渉して、置いてある荷物を整理してきれいにして提供していくのも開発に時間はかかるので、今 5 年を迎えるん

ですけど、全部で 4 室の運営に至っている状態です。写真のような、こんな感じの内装をやっております。



今 3 棟目 4 室目の写真を映しているんですが、ここは土蔵の部屋になりますね。土蔵は宿泊に向いているかという、湿気も溜まりやすいし、どうしても古い匂いが取れきらないところもあるので、難しい物件でもあるんですが、ここは下屋の部分に穴が大きく開いてしまっていて放っておくと、多分大雪の時に潰れてしまう可能性があった物件でした。なので、これ古民家を守るという意味も込めて、ちょっと宿泊向きじゃないけども挑戦してみようというのでやった物件でもあって、村の古民家を保全していくための取り組みでもあります。



今受付の写真を提示しているんですが、宿の受付をシェアオフィス菱屋の 1 階に新しく作って、そこにお客様が来てもらって村や宿泊施設の説明をして、鍵を受け取ってもらうという運営をしています。

貴重なお客様との接点なので、ここでいろいろ村の注意点とか周りのお店の説明、地震とかがあった時の避難所なんかの必要な情報をお伝えして、鍵をお渡しします。

お客様が鍵を受け取ると、そのまま自分の別荘のような形で部屋を使っただけというサービスになっています。



村の中にはお宿が全然なく、お店も全然ない状態なので、夜の食事の提供なんかに工夫が必要なエリアでした。

今何種類か部屋に食事を運び込むサービスを実施しているんですが、その中でも一番人気なのが、熊川の婦人会の皆さんと組んだおもてなし膳というのを提供しています。



もともと熊川で食べられていた本当の田舎料理ですね。地域の伝統料理を新しく器なんかを調整して、盛り付けや味付けをちょっと工夫して、お膳に仕上げて部屋に運び込みをしています。その時も我々じゃなくて、おもてなしの会の方々が割烹着を着てバンダナを巻いて、そ

れがユニフォームなんですけど、それで部屋まで運び込んでくれて、村の食文化の説明をしてくれるというサービスをやっております。

今でも一番人気のサービスになっていますし、直接その婦人会を通じて村の方にもお金が落ちるやり方になっています。とても我々にとってもお客様にとっても面白いサービスで人気を博しています。

八百熊川古民家ホテルをやり始めてから 1 年後ぐらい、地元のいろんな生産者の方とのご縁も深まって、そういう方々をお願いをして、小規模なおかずとか特産品のパックを作ってもらい、それをオンラインショップで販売する形で、物販事業を開始しました。

その後、例えば小浜のとば屋酢さんとかと一緒に、オリジナルのポン酢を開発したりとか、小浜の箸屋さんと一緒にオリジナルの箸を開発したりで、OEMですね。発注をして仕入れさせてもらうというような形の商売が広がってきて、今からもう 2 年前に今度は自社で製造を開始しようというので、食品加工所事業を始めました。



村の中の空き家をまた改修して、食品加工所を整備して、自社で食品加工業を開始しました。扱っているのは、若狭町にはいろんな伝統野菜が残っているので、例えば山内かぶらのような伝統野菜の生産者団体と組んで、山内かぶらの使ってなかった種の部分をもらってきて、それをすりつぶした和食に合う粒マスタ

ードという商品を作らせてもらっています。これ一つ目の商品ですね。



また熊川では白い粉の葛が有名なんですけども、その葛を作っていらっしゃる熊川葛振興会の皆さんと一緒に夏場の商品を作ろうというので、葛の葉っぱの部分を手摘みしてもらって、葉草茶にする熊川葛の葉茶なんかも作っております。

今全部で5品目ぐらいまで自社商品が増えて各所に卸売を始めていますね。道の駅とかあとは東京でもセレクトショップにいくつか卸させてもらったりで物販製造から物販業に広がっていているところがございます。

こんなことをしていると、ここ5年間で全部で14軒ほどの空き家利活用が発生しました。自社で取り組んだのは、6軒になりますので、残り8軒は外の方が熊川に飛び込んできてくれたような形で古民家の活用が起きています。

これも我々が呼びかけをしたとか大々的に古民家を活用するキャンペーンのようなものをしたわけじゃないんですけども、多分、起きたのは、これまで伝建地区で保存の街づくりをずっとしてきた村でなんとなく商売をしにくいとか飛び込んできて、地元の方の前で商売するのが、なんとなくムード的にやりにくいとか、保存の街づくりというのが長く続いていたので、雰囲気はそういう雰囲気になっていたと。そこで我々半分地元出身の僕も含めて、ここで商売を地元の方を巻き込みながらしていることで

なんとなく商売していいんだと、熊川でも商売成り立つんだなみたいなそういうプラスのイメージがこの5年間でいろいろ広がって、なんとなくエリアのイメージが変わっていったかなというのが実感しています。

街づくりにおいてもこのエリアのイメージが変わっていくというのがすごく重要だなというのを実感しております。



ここまで来てですね、若狭町役場の方ともいろいろ一緒する機会も増えてきてですね、熊川は宿場町なんですけども、もともとこの熊川エリアは山の里というエリアなので、山のまちづくりも広げていこうというので、初めに熊川トレイルという山道を整備しました。若狭町の事業ですね。若狭町の方に整備していただいて、その登り切ったところにある県のダムの工事用地であった場所を民間で借り上げさせていただいて、公民連携事業という形で、山座熊川(さんざくまがわ)というアウトドア施設を一昨年開発して、昨年より運営を開始しています。“山に座る”と書いて山座なんですけども、熊川の山のエリアの魅力を感じてほしいというので、山にしっかり向き合えるようにというので、“山座”という名前にしました。



山座熊川は別荘のような建物ですね。キャビンと呼んでいる建物が、全部で6棟、車が横付けしてキャンプができるオートキャンプサイトが12サイトある複合施設になっています。キャビンの方は全部で5ベッドあるので、6棟を合わせて30ベッドが確保できています。

オートキャンプサイトの方は水回りですね。シャワーとかトイレとか洗面がついた水回りユニットというのが整備されておりまして、テントさえ持ってきてもらえば快適に水回りを使って宿泊することができるという施設になっています。



食事提供も頑張っていて、人気なのはバーベキュー場で出来る七輪焼きのセットが人気になっていますね。バーベキューといっても食品加工所で使ったおぼんざいなんかと並んで宅上のかまどでご飯を炊いて地元の漬け魚と一緒に食べてもらうとても和風な七輪焼きセットが人気になっていて一番出ている。

あと部屋でも食べてもらえる土鍋セットも提供しておりますが、山座熊川まで事業が広がっ

ていく過程で、もともと食品加工所として整備した場所が村のセンターキッチンのような形になってまして、そこで料理をして、各施設に入食のお惣菜を届けるというような運営が確立されております。



ペット連れ対応の棟を半分ぐらい用意しておりまして、これがとても人気になってますね。

夏の間はペット連れの棟の方が稼働率が高かったというような結果になっていて、中京圏とか関西圏からペット連れのお客さんもたくさん来てくださっている場所になっています。



この図は熊川の全体を表示しています。もともと宿場の古民家を活用した町づくりを進めていたんですが、そこから車で10分ぐらいの場所にある山座熊川というアウトドア施設も開発しました。

宿場の町づくりだけだと、なかなかイメージが作れないですね。宿場の町というよりも、今はこの山村全体を活かして山の幸とか山のアクティビティも楽しめるし、さらに古民家で宿泊

したり文化体験ができるという、この歴史文化と自然の魅力が両方ある山村として、熊川のまちづくりを進めていこうとしています。こういう町づくりの座組みを広げたというのが、大きな狙いでした。もう1つは宿場町だけだと経済規模がそんなに作れないので、山の上のキャンプ施設今全体で70名ぐらい収容できるんですが、その施設があることで熊川に訪れる方々の種類を増やせますね。企業の研修だったりイベント受け入れだったり今山座熊川で可能になってまして、山座熊川で人にたくさん来てもらって、宿場にも人が流入したり、また、お金も山座熊川で大きく商売としては稼げる可能性があるんで、利益を出して、また熊川の古民家の保全にお金を回したりというお金の流れも新しく作れるかなというのを狙って、事業を広げております。



今画像は1個のプログラムを作っているときの写真になっているんですけども。

昨年観光庁と一緒に、ウェルネスツーリズムのプログラム開発なんかもやっています。これから山座熊川と八百熊川宿場と山の方を両方活かしたプログラムをいろいろ作っていきこうという時期に入っております、去年は腕にウェアラブルデバイスをつけて、健康値の測定特にストレス値の計測ができるという会社と一緒に、山と里を楽しんでもらうと、実際にストレス値が下がるという企業向けのプログラム開発をしたりですね、最近ではいろんな健康法

をやっている団体が、山座熊川をまとめて団体で借りてくれたりというのが今始まっています。

今年2025年の営業においてもいろんな企業の方やイベント受入れなんかの相談が今進んでいる状態になっています。

都市部に負けない勤務条件・環境をつくる。

文化資本・自然資本への再投資を続ける。



地域資源を活かす事業を複数営む

30名程度の優良中小企業

DEKITA

「100年続く会社」

僕らはいま宿場と山の方で事業を展開しているんですけども、一番大切だと思っているのは、この日本の田舎ですね。山村の事業にやっぱりいい会社、都市部に負けない勤務条件とか勤務環境を持っていて、さらに事業も安定して、文化資本とか自然資本への再投資を続けられるような会社があることが街づくりにおいて一番重要だと思っている、今デキタでも会社を安定させるためにいろんな取り組みをしています。

最近だとフレックス制のさらにコアタイムがないスーパーフレックス制という自由な働き方があるんですが、スーパーフレックス制を導入したりとか、あとアプリを使った勤態管理に切り替えてどこに出社して、時間単位で働く時間を選ぶというような自由な働き方の実現をしたりとか会社の運営に今後のまちづくりにとってとても重要なポイントがあるんじゃないかなと思って頑張っております。



最後は山座熊川と宿場を俯瞰した図なんですけども、今この山の拠点、山座熊川と宿場側のまちづくりが進んでいるんですが、その2つの拠点の間に熊川の森が広がっています。これがいわゆる村有林だったりするんですけども、これからはこの2つの拠点を活かしながら、この間に広がる熊川の森の活性化、森の利活用にも事業としては入っていきたいと考えています。

来年度以降、どういうふうな事業がこの森を使って可能なのかいろいろ試していくような1年になるんじゃないかなと思っております。

今はまだ少ないですけども、今回呼んでくださっている育林交流集会のような方々も含めて、

来年から熊川の森づくりとか熊川の森の活用などに、いろんな団体さんと取り組んでいくんじゃないかなと思っております。ちょっとざっぱくな感じではございましたが、以上で株式会社デキタのプレゼンを終わらせてもらいます。

ありがとうございました。

<ナビゲーターのコメント>

昔、人は森林の資源をたくさん使っていました。人が使うことによって、維持管理されていたのが「里山」。人の暮らしと山の距離はとても密接なものでした。

今、資源は遠くから運ばれて買うものになり、森林と人の暮らしは遠くなってしまいました。それが、日本の森に生じている問題、獣害や森林の手入れ不足などに関係しています。

デキタさんの活動は、森林の近くに心地よい人の暮らしの場を作り、再び森と人の暮らしを新しい形で結びつけています。これは「新しい里山づくり」だと思いました。

現代にあった「新しい里山」をつくることで、森を健全に地域の次世代に継承していけると思います。

第47回全国育樹祭併催行事 育林交流集会

「開催の記録」

第47回全国育樹祭福井県実行委員会 (令和7年3月)

